

澤田美喜の文化事業から福祉をみつめて —仕事を支えた信仰半分と意地半分—

吉田 博行

はじめに

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」（長崎県、熊本県）がユネスコ（国連教育科学文化機関）の国際会議で、2018（平成30）年に世界文化遺産に登録された。約250年に及ぶ禁教期、秘かな祈りを守り続けた世界的にも稀有な遺産である。多くは素朴な集落や集落跡で、その風景の中に、潜伏時代の物語がある。不動産としての遺産を結びつけるその物語が重視され、独自の価値が認められた¹⁾という。

一方、神奈川県大磯町の澤田美喜記念館は、美喜が蒐集したキリシタン遺物や関連する品々が展示される。ここは、エリザベス・サンダース・ホームの創設者である澤田美喜の生前の遺志を引き継いで開設された。

2018（平成30）年5月13日、エリザベス・サンダース・ホームの70周年記念式典と澤田美喜記念館創立30周年を祝う式典が、ステパンノ学園の海が見えるホールで開かれ、多くの関係者が集まった。澤田美喜といえば、戦後の混乱期に混血孤児救済に半生を捧げた人物として知られる。エリザベス・サンダース・ホームの事業が代表的であるが、その実績は、文化事業、社会（福祉）事業、教育事業と整理される。

筆者は、長い間、澤田美喜の人物とその実績に関心をもちつつ、ベールに包まれた福祉施設という印象をもっていた。それは、美喜の人物像とトンネルの向こう側の世界という意識があったのかもしれない。

しかし、今回、澤田美喜記念館を訪れ、文化事業にふれ、エリザベス・サンダース・ホーム内を見学することができた。本稿では、その貴重な体験を踏まえ、文化事業から社会（福祉）事業、教育事業へ視点をあて、澤田美喜とエリザベス・サンダース・ホームの福祉をみつめ考えてみたいとおもう。

1 澤田美喜の歩み

澤田美喜記念館とエリザベス・サンダース・ホームの門を入ると、岩に覆われたレリーフがある。そこには、美喜の生涯が刻まれていた。

澤田美喜は、三菱財閥の本家・岩崎久弥（創設者・岩崎弥太郎の長男）の3男3女の長女として生まれた。2人の祖母「美和」と「喜勢」から1字もらい「美喜」と名付けられた。岩崎家は、神奈川県大磯に広大な別荘を所有していた。美喜は、大磯の別荘で静養しているとき、看護婦（師）が聖書を読んでいたことをきっかけに、キリスト教に関心をもつようになった。

しかし、岩崎家は代々仏教徒だったことなどから、家族には反対されていた。

美喜は「外国で生活したい」希望をもっていた。22歳のとき、外交官・澤田廉三と結婚し、妻として、3男1女の母として、生活を支えた。澤田家は、キリスト教を信仰していた。イ

ギリス滯在中に「ドクター・バーナードス・ホーム」を見学したことが、美喜の人生を変えるきっかけとなった。

終戦を迎え、孤児、混血児に心を痛め、混血孤児救済を決意し、エリザベス・サンダース・ホームへの道を歩むこととなる。その後、ステパノ小学校・中学校を開校する。卒園後の子どもたちのために、国内外におよぶ支援を展開する。

苦難に直面したときは、祈りを捧げた。キリスト教を信仰し、キリスト教の収集にも力を注いだ。スペインのマジョリカ島旅行中、死去。享年78歳であった²⁾。

澤田美喜女史の生涯

1901（明治34）年9月19日、三菱本家岩崎久弥の長女として東京に生まれ、中等教育終了後家庭あって個人教育を受け、高度の学問、技芸を修める。11歳の時、この地にあった別荘に病後を静養中、付添看護婦より聖書のことばを聴き、キリスト愛に感動する。

1922（大正11）年、外交官澤田廉三と結婚。以後夫君と同じ信仰に立ち、アルゼンチン、中国、イギリス、アメリカ各日本公館にあって国際外交に活躍し、内助の功を積むこと20余年に及ぶ。

たまたま、ロンドン在勤中、ドクター・バーナードス・ホームを訪問、孤児たちへの慈愛溢れる養育と将来に備えての教育とに接しこの道に召命を感じ、他日の献身を志す。

1936（昭和11）年、夫君に従って帰国、1941（昭和16）年、太平洋戦争勃発、以後三男の戦死、敗戦と降伏、財閥の解体等の受難を体験する。米軍進駐9箇月後、日本混血児1号出産。以後諸処に混血児の遺棄あるを見聞し、心を痛める。

この頃、列車旅行中、混血嬰児の風呂敷包み棚より膝に落ち、警官の疑いを受ける。これを契機とし混血遺児救済に着手する。財産税のため物納されていた別荘を、借入金を工面して買い戻し施設に当て、一英国老婦人の遺言による初めての寄付170ドルを基金に加え、1948（昭和23）年2月、寄付者の名を冠し、社会福祉法人エリザベス・サンダース・ホームを設立、理事長兼園長に就任する。

次々に運びこまれ、あるいは門前に遺棄される混血児の母となって養育。持てる物すべてを売り尽くし得た資金、篤志家の献金、11回に及ぶ北米遊説により与えられた淨財等をもって施設を拡大充実し、幼稚園、小、中学校を建てて愛児たちを教育する。かくて30年間に育てあげられた者約2,000名。内約600名は米国及び海外の家庭に養子となり、それぞれの国に渡り自立。6名はアマゾン河流域に買い与えられた300万平米の開拓地に入植して新天地を開く。

事業開始当時、妨害、乗取工作、中傷等に直面し、孤独と絶望に陥る時、キリスト教の遺品の並ぶ小堂において祈り、力を与えられることしばしばであった。

その小堂を抱く修養道場を建て一般に公開する計画遂行中、スペインのマジョルカ島に旅し、その地にて病を得、天に召される。時に1980（昭和55）年5月12日 享年78。1982（昭和57）年11月 武藤富男記す³⁾

2 エリザベス・サンダース「ELIZABETH SAUNDERS」について

澤田美喜とエリザベス・サンダース・ホームの名前は、広く知られているが、エリザベス・サンダースについては、あまり知られていないとおもわれる。そこで、人物とエリザベス・サンダース・ホームとの関わりについて、まとめておきたいとおもう。

英国婦人のエリザベス・サンダースは、1946（昭和21）年10月3日午前11時4分に聖母病院で逝去、享年76歳であった。エリザベスは、1870（明治3）年2月22日生まれ。出生地は、英國南部小島のワイト島、バートン村フィビングガムで、両親はトム・サンダースとジェーン・サンダースで、母の旧姓はワトソン。父親の職業は、農園労働者であった。父の働く農場は、オズホーンハウスの農場で、母も共稼ぎで、経済的には貧しく慎ましい生活であったようす。エリザベスの幼い頃の思い出によると、仕事している両親から離れて遊んでいると、自分の前に、散歩されるピクトリア女王の姿があったという。

明治の末、三井財閥家の1人である三井高保の子、高精は三井物産ロンドン支店に勤務し、妻の勇との間に高国が生まれた。エリザベスは、幼い高国の乳母、養育係として雇われた。大正の初め、1913（大正2）年に一家の帰国とともに来日（当時43歳独身）し、その後33年間一度も英國の土を踏むことなく、三井高国の保護者、相談相手として、日本で一生を送った。英國聖公会の信徒であったエリザベスは、聖公会の流儀で葬儀が行われ、横浜外人墓地に葬られている。エリザベスは、質素で高潔な人だったようで、三井家から支給された手当を貯金しており、当時としては、かなり高額な5万円程が残されていた。その遺産について、三井高国と親しかった英國人アーサーバッキンガム・ミラー婦人トモエと吉村チエ、英國人聖公会の信徒ルイス・ブッシュの3人で、エリザベスにふさわしい何かに役立てたいと相談した。結果、子どものための福祉事業に役立てるのが最も望ましいと考えた。そこで、聖公会の信徒で、澤田美喜と交流のあった米国人のポール・ラッシュにアイデアを求めた。ポール・ラッシュから澤田美喜が施設をつくる準備をすすめていて、資金が足りないことを聞いたルイス・ブッシュらは、資金を使うのに適した事業であると考えた。こうして、施設の開業資金の一部として、遺産が寄付されることとなつた。当然であるが、エリザベスは、そのことは知らないし、美喜と出会ったこともなかった。エリザベスの死後、1年たった1947（昭和22）年10月、神奈川県大磯町にある岩崎家の邸内に施設の建設が始り、翌1948（昭和23）年2月1日に開設された。美喜は、エリザベス・サンダースの名前をそのまま残し、施設名をエリザベス・サンダース・ホームとして、今日に至っている^{4)、5)}。

3 大磯町の概要

JR 大磯駅から左に海へ向かう道路には、「Oiso Beach 湘南発祥之地 大磯海水浴場へようこそ」という水色とブルーのアーチがかかっている。かつて、ここは海水浴場として賑わい、町が発展した。やがて、1957（昭32）年には、わが国最初の有料海岸の大磯ロングビーチがつくられ人気が高まった⁶⁾ことでも知られる。

大磯町は、神奈川県のほぼ中央に位置し、南は相模湾に臨み、北は高麗山や鷹取山に代表される大磯丘陵に囲まれた東西に長い町域をもち、その町域は大磯地区と国府地区に大きく分かれる。大磯地区は中世以来、東海道沿いの宿場町として栄え、国府地区は、とりわけ相

模国最後の余綾国府として古くから特有の文化が展開されてきた。気候温暖な自然環境のある両地区は、近現代にはいって別荘地や住宅地としてにぎわい、経済・文化・環境等の面で、大きく変貌、発展し現代に至っている⁷⁾。海もあって、山もある。豊かな自然と心地よさが大磯町の魅力でもある。

2019（平成31）年1月1日現在、大磯町の面積は、17,23 km²、世帯数12,596世帯、人口31,412人である。地名にみられる高麗や高来などは、かつて、朝鮮半島から渡來した人が住んでいたことに由来するともいわれる。1954（昭和29）年12月に大磯町と国府町が合併し、大磯町となった⁸⁾。1965（昭和40）年、大磯町は、合併10周年事業として、名誉町民条例を制定し、功績が顕著な者に名誉町民の称号と名誉町民賞を贈る顕彰を始めた。初の名誉町民称号者には、吉田茂元首相と安田靭彦画伯が選ばれた。1980（昭和55）年、エリザベス・サンダース・ホームの創設者澤田美喜は、スペイン旅行中に急逝したが、美喜の生涯をかけた献身に対して、町は名誉町民称号を追贈した⁹⁾。

4 澤田美喜記念館を訪問して

JR 大磯駅前ロータリーの南側に緑に囲まれた小高い丘（通称岩崎山）がある。澤田美喜記念館は、門を入り、長い80段の階段を上った丘にある。ここは、エリザベス・サンダース・ホームの創設者、澤田美喜の生前の遺志を引き継ぎ、1988（昭和63）年4月19に開設された。三宅敏郎氏設計による免震構造を採用した建築物で、外観は、長六角計の船の形をしている。1階のコレクション展示室は、美喜が蒐集したキリスト教遺物や関連する品々874点のうち、約300点が常設展示される。2階は、礼拝堂になっていて、そこにつながる階段の窓には、13世紀の技法によってつくられたグリザイユパネルがはめ込まれている¹⁰⁾。

美喜の生前の遺志は、「キリスト教記念館建設趣意書」として、記される。

当記念館に展示されている隠れキリスト教の魔鏡は、国内に2点しか存在しないとされる。これは一見すると、鏡面が普通の銅鏡に見えるが、表面に光を当ててその反射光を壁に投影すると、キリスト像が映し出される。同種の鏡は、ローマ法王に献上された。隠れキリスト教の信仰を今に伝える貴重な遺物の1つである。

キリスト教信仰を示す日本刀の鍔が数多く展示されていた。17世紀作といわれる鍔には、網を引く漁師の姿があるが、ルーペなどで、よくみると左の胸に金色の十字が見える。武士でなくとも持つことができた脇差しの鍔で下級武士の所持品であろうといわれる。NPO法人日本刀保存会理事の中西氏によると、キリスト教遺物約千点のうち、刀の鍔359点を調査整理し、48点をキリスト教鍔と鑑定した。結果、この鍔は禁教後の17世紀の作であると分析した¹¹⁾。

当記念館で所蔵されるキリスト教の信仰画「ご聖体の連禱默想の図」のレプリカが公開されていた。これは国内最古級の信仰画で、16世紀末の安土桃山時代に制作された可能性が高いことが、記念館などの調査で分かった。2018（平成30）年11月23日から横浜市歴史博物館でも一般公開された。記念館と博物館によると、信仰画は、和紙に墨で描いた巻物で、長さ320センチメートル、幅22センチメートル。聖体（ミサで使うパン）をたたえる祈りの言葉の連祷とイエスとマリアの生涯を15の場面で描いた默想の図からなる。默想の図は現存するもので3例目であるが、両方で一つの作品になっているものは初めてという¹²⁾。

キリスト記念館建設趣意書

澤田美喜

すばらしい日本キリストの殉教者達との出会いは、サンフランシスコ横浜間の船の上でした。白山丸の図書室で読んだ本で、ローマの殉教者達のそれにもまして美しい殉教が日本にあったことを初めて知りました。

それから40年、私がキリストに魅せられて、九州の島々をめぐり歩いて集めた遺物の数は千点をこえました。これらの、殉教者の子孫が守ってきた品々に私は強い信仰心の息吹を感じます。そしてこの10年間、子供達を守り育てる仕事の中で、私は幾度これらの遺物の前で祈り、力づけられたかわかりません。これらの遺物を納めたチャペルは私の「かけ込み寺」でもありました。失望と悲嘆と涙と怒りの時、このかけこみ寺は私に光と希望と、そして忍耐を与えてくれました。

私はこの得難い経験を私有することをやめて世の多くの方々の為に魂の療養所を建設し、キリスト遺物のすべてをお献げしたいと思います。そしてキリスト教を信じる、宗派を超えた信徒が一つになって、この世にもまれな、誇るべき私共の先祖の宝を守って行きたいのです。この建物を「一致教会道場」と名付け、平和を愛する信仰をもり立てて参りたいと存じます。御協力をお願い致します。

1980年4月

この文は、故人がスペインに旅立つ前に書かれ、遺言となりました¹³⁾。



澤田美喜記念館 2019年9月5日、筆者撮影

その他、踏み絵、マリア観音、禁制の高札、十字架のコレクションなどの品々が展示されていた。記念館長の西田恵子氏によると、美喜がコレクションを始めたのは、1936（昭和11）年。米国から戻る船上で、隠れキリストを紹介する本を読んだのがきっかけだった。帰国後、九州に出かけると、キリスト遺物が散財していることを知り、散逸をおそれて収集に乗り出した。踏み絵やマリア像、禁制

の高札といったと品々が集まり、思いを書いた本を1941（昭和16）年に出版している¹⁴⁾という。

正面奥には、美喜や亡くなった孤児たちの遺影が飾られていた。エリザベス・サンダース・ホームで育った人々は、今でもここにきて遺影に話しかける機会があるという。階段のステンドグラスと2階の礼拝堂も見学した。

美喜が蒐集した遺物には、歴史的、文化的等にも価値があり、今後の調査研究が期待される。

5 社会福祉法人エリザベス・サンダース・ホームを見学して

(1) エリザベス・サンダース・ホームとトンネル

澤田美喜記念館の丘からは、木々の隙間から駿河湾がみえた。記念館の裏手には門があつて、少し下る細い山道がある。この道が、エリザベス・サンダース・ホームにつながっていた。山道が平らになったところ、右手に岩崎邸の蔵あった。今回は、記念館の裏手からまわって施設を見学させていただいた。

現在、社会福祉法人エリザベス・サンダース・ホームの事業は、児童養護施設「エリザベス・サンダース・ホーム」と幼保連携型認定こども園「あおばと」の経営、及び「澤田美喜記念館」の事業等が運営されている。

美喜は、彼女の努力によって、誰にも真似のできないような偉業を成した。「歴史の落とし子」とよばれた子どもたちのために、すなわち進駐軍の兵士と日本女性との間に生まれた子どもたちのために、1948（昭和23）年2月、乳児院エリザベス・サンダース・ホームを設立し、初代園長となった。彼女は、設立の日に「この子達は、あすの世界平和を築く為に、絶対に必要な使徒達なのです」と述べたという¹⁴⁾。ホームには、次々に混血児が集まってきた。拾われた孤児やホームの前に捨てられた孤児、母の手で直接ホームに連れてこられた孤児もいた。第1期生は6人の孤児たちであった¹⁵⁾。児童養護施設内にはグラウンドがあり、サッカーゴール前に小さい靴が転がっていた。子どもたちが遊んでいた様子が想像された。グラウンドの端には、大きなクスノキ2本がそびえていた。長い年月をかけて、子どもたちを見守っていたのだろう。



トンネルから見たエリザベス・サンダース・ホーム
2018年10月2日、筆者撮影

その付近で、関係者の方が自転車で通過していく。

筆者は、かつてからこのトンネルの存在が気になり、施設の印象をいだいていた。内と外の世界。入っていった先は、どうなっているのか。どんな世界があるのか。暗闇から光がさしているのか。そうしたことをかってにおもいめぐらせていた。施設を見学し、トンネルを通って、はじめて歴史の一場面にふれたおもいがした。

エリザベス・サンダース・ホームの内部からトンネルを通して、外に抜けた。このトンネルは長さ約120メートル。高さは馬車が通れるほどであるという。このトンネルに関しては、幾つものドラマがあったと伝えられる。当時、朝起きると、トンネル内に子どもが置かれていることも少なくなかつたため、毎朝ここを確認するのが美喜の日課だったという。かつては、中間地点に横穴もあり、養蚕に使っていた桑の葉を貯蔵していた。今は、横穴は埋められていた。

(2) 「R・SAWADA」旧澤田邸について

エリザベス・サンダース・ホーム内には、岩崎家別荘以来の平屋の日本家屋が、現在も存在する。「R・SAWADA」という表札のかかった旧澤田邸である。部屋の中を見学させていただいた。小坂井澄著『これはあなたの母沢田美喜と混血児たち』(集英社)では、「エリザベス・サンダース・ホームになってからの大磯別荘の建物では、本邸のその場所にあたる十畳二間続きあまりの座敷が、美喜の居室になっていた。座敷の一番東側の床の間に祭壇。十字架像のほかに、キリスト教の遺物であるマリア観音や踏絵、あるいは東方キリスト教のイコンなどが飾られているのが珍しかった。美喜の長年にわたる収集品である。とくに遺物に対しては、たんなる収集以上の、そこに自己の信仰のよりどころを見出そうとする情熱と崇敬がこめられていた」¹⁶⁾とある。

青木富喜子著『GHQと戦った女沢田美喜』(新潮社)によると、「かつてここにあった岩崎家別邸の名残で、床の間のある8畳と掘り炬燵のある10畳間だけがそのまま残された。ここは美喜が書斎として使っていた部屋で、それが当時のまま保存されている。周り廊下と床一面に並ぶ書棚には美喜の蔵書がいっぱいいまっていて、若くして世を去った妹の澄子と戦死した三男晃の写真が飾ってある。つい今しがたここで美喜が手紙を書いていたり、原稿執筆に精を出したりしていたように錯覚するほどだ」¹⁷⁾と記される。同様に、ここにある書棚



「R・SAWADA」旧澤田邸 2019年5月25日、筆者撮影

や写真、テレビなど、その時ままでタイムスリップしているようだった。書棚の前には、美喜と第1期生の子どもたちの大きな白黒写真のパネルが置かれていた。本棚をよくみると、多くの洋書とキリスト教やかくれキリスト教の文献が目についた。本棚には番号が付けられていて現在は、整理中のようにあった。美喜は、この部屋の炬燵でタイプライターを打つのが日課だった。筆者は、ここにあるすべてものが、研究にとって貴重なものであると感じられた。

(3) 認定こども園あおばとについて

エリザベス・サンダース・ホームでは、最初に認定こども園あおばとを外観した。出入り口は、裏門につながっていた。

認定こども園あおばとは、2016(平成28)年4月に開園された。大磯町市民福祉部子育て課編発『大磯町子育てガイドブック』によると、認定こども園あおばとは、幼稚園部門の定員は31人、対象年齢3歳児～就学前、開園時間月～金曜日7：30～19：30。保育部門は、定員44人、対象年齢6カ月過ぎ～就学前、開園時間、月～土曜日7：30～19：30とある。教育方針は、1 安全で安定した環境の中、子ども達1人ひとりの成長・発達を大切にします。



認定こども園あおばと 2019年5月25日、筆者撮影

2 大磯駅の目の前、あおばとが飛来する樹木に囲まれた環境の中、子ども達1人ひとりの感性大にし、自由にのびのびと教育・保育を行っています¹⁸⁾。と紹介されている。キリスト教の精神を拠り所として、教育及び保育を一体的に行うことを目的としている。エリザベス・サンダース・ホームから及び地域からの子どもさんの利用も受け入れているという。たまたま、見学当日は、休園日であった。

6 聖ステパノ学園について

その後、美喜は、学齢に達した子どもたちのために、1952（昭和28）年4月、聖ステパノ学園小学校を開校し、初代校長及び理事に就任した。同年発行された『大磯小学校八十年史』では、ステパノ学園について「現在彼等に対する方向は2つ考えられる。1つは、社会性を養う意味において、一般日本人と同様な教育を。他の1つは、これ等の児童の特殊性を認め、特殊施設内において特殊教育を。両者には何れも理由のあるところであるが、諸種の理由から前者が大体主流をなしている。後者を代表するのが澤田女史の主張で、エリザベス・サンダース・ホームは、これによろうとしている。エリザベス・サンダース・ホームは、施設内に昨年度来幼稚園を開設し、園児の保育にあたって、今年より同施設内にステパノ学園を設け、一貫した教育をしようとしている」¹⁹⁾と位置付けられる。ステパノ学園の教育方針は、「敗戦の落とし子」たちの個性や人権を重視する立場から、一般的



聖ステパノ小学校・中学校 2019年9月5日、筆者撮影

小学生との別学を実践したものであって、当時としては主流ではなかった。さらに、美喜は教育行政とは対照的に、1959（昭和34）年4月、聖ステパノ学園中学校も開校し、初代校長となった²⁰⁾。ステパノとは、戦死した、三男晃の洗礼名で、その名をとってステパノ学園とした²¹⁾。

エリザベス・サンダース・ホームからトンネルを通り抜けると聖ステパノ学園の校舎に突き当たり、海が見えるホールへ向かう坂道へと続いていた。駅前のロータリーから聖ステパノ学園を眺めた。

まとめとして

澤田美喜といえば、エリザベス・サンダース・ホームの創設者としての実績が代表的である。しかし、それは一面に過ぎないことに気づかされた。美喜の実績をみると、文化事業、社会（福祉）事業、教育事業の3つに整理される。今回は、文化事業の側面から接近し、エリザベス・サンダース・ホームの事業にふれることができた。こうした事業のはじまりは、キリスト教信仰が根底にあり、社会（福祉）事業へ展開し、やがては教育事業へと発展していった。美喜にとっては、どの事業も必要であったと考える。

晩年、美喜は自分の仕事を支えてきたのは「信仰半分、意地半分」と口にしていたという。信仰は、キリスト教信仰であり、各事業展開の大もとにあたる。そして、キリスト教に対する出会いもあった。かくれキリスト教の遺物については、澤田美喜記念館へと発展し紹介されている。蒐集された遺物の中には、今後の調査研究が期待される貴重な品々が散見された。

信仰心をもとに、美喜がエリザベス・サンダース・ホームへの道を歩むことになったきっかけは、いくつかあるとおもわれる。たとえば、ドクター・バーナードス・ホームの訪問や戦後混乱期の孤児、混血児の問題、旅行中列車内の風呂敷に包まれた混血児の事件など、があげられる。そうした時代、美喜の強烈な個性と様々な条件が重なり合って、社会（福祉）事業を推し進めることになった考える。そして、最初のころから、事業展開の大きな原動力になっていたのは、彼女の意地であったとおもわれる。負けず嫌いで、物事に立ち向かっていこうとする美喜の性格や人物像についての理解が必要と考える。

今回、澤田美喜記念館を訪れ、文化事業にふれることによって、エリザベス・サンダース・ホームの社会（福祉）事業について、みづめ考えるきっかけとなった。実際に施設内とトンネルを見学できたことは、良い体験となった。記憶に残り、施設に対する印象も変わり、新たな気づきもあった。旧澤田邸については、その保存と今後の調査研究が重要であると感じられた。

戦後、あえて厳しい道に向かっていった美喜の実績は、時代の変化に対応しつつ、今でも後継者に受け継がれていた。

また、大磯に訪れて、丘の上から蒼い海をながめてみたいとおもう。

澤田美喜記念館とエリザベス・サンダース・ホームの見学では、澤田美喜記念館館長、理事の西田恵子氏に大変お世話になりました。ありがとうございました。

【注】

- 1) 朝日新聞「潜伏キリストン風景は伝える」朝日新聞社、2018年6月24日付。
- 2) 本庄豊編『シリーズ混血孤児②混孤児—エリザベス・サンダース・ホームへの道』、汐文社、2014年、12ページ～21ページ。
- 3) 武藤富男記す「レリーフ」1982年。澤田美喜記念館入口に彫刻の浮彫、レリーフにあった。澤田は、沢田と表記されていた。文献や資料によって、異なるが、本稿では、できる限り澤田を用いることにする。
- 4) ステパン学園長小川正夫著「ミス エリザベスサンダース」、聖ステパン学園小学校・中学校ステパンだより編集委員会発「ステパンだより第18号」2000年3月1日。大南勝彦著『エリザベス・サンダース物語』リーベル書房、1997年からヒントがあったと記される。
- 5) テパン学園長小川正夫著「ミス エリザベスサンダース」聖ステパン学園小学校・中学校ステパンだよ

り編集委員会発「ステパンだより第58号」2003年7月1日。実際に現地を訪ねた内容が記載される。

- 6) 大磯町編発『おおいその歴史『大磯町史』11別編ダイジェスト版』2014年、232ページ～235ページ。
- 7) 前掲6)、はじめに。
- 8) 大磯町、株式会社サイネックス発『おおいそ暮らしのガイド』14ページ。
- 9) 前掲6)、202ページ。
- 10) 大磯まちづくり会議編発『大磯建物語②澤田美喜記念館 隠れクリシタン資料館』2017年3月。
- 11) 渡辺延志著『神奈川の記憶』有隣新書、2018年、40～45ページ。
- 12) 神奈川新聞「国内最古級の信仰画」神奈川新聞社、2018年11月21日付。
- 13) 澤田美喜「キリスト記念館建設趣意書」1980年4月、コピー文。前掲10)にも記述される。
- 14) 前掲12)
- 14) 大磯町編発『大磯町史7 通史編 近現代』2008年、685ページ～687ページ。
- 15) 前掲2) 22ページ。
- 16) 小坂井澄著『これはあなたの母澤田美喜と混血児たち』集英社、1982年、62ページ。
- 17) 青木富喜子著『QHGと戦った女澤田美喜』新潮社、2015年、10ページ。
- 18) 大磯町民福祉部子育て支援課編発『大磯町子育てガイドブック』2018年、29ページ。
- 19) 前掲14)
- 20) 前掲19)
- 21) 前掲16)、41ページ。

【参考文献】

- 1) 澤田美喜・影山光洋著『歴史の落とし子 —— エリザベス・サンダース・ホーム10年の歩み ——』読売新聞社、1958年。
- 2) 澤田美喜著『黒い肌と白い心 —— エリザベス・サンダース・ホームへの道 ——』日本経済新聞社、1963年。
- 3) 日本テレビ放送網株式会社『子供たちは七つの海を越えた』読売新聞社、1979年。
- 4) 澤田美喜著『母と子の絆—エリザベス・サンダース・ホームの三十年』PHP研究所、1980年。
- 5) 澤田美喜著『澤田美喜 黒い肌と白い心—サンダース・ホームへの道』日本図書センター、2001年。
- 6) 高橋節子著『混血児』磯部書房、1952年。
- 7) 森村誠一著『人間の証明』角川文庫、1977年。
- 8) パール・バッック著『隠れた花』国書刊行会、2014年。
- 9) 石井光太著『浮浪児1945—戦争が生んだ子供たち』新潮社、2014年。
- 10) 下池ローレンス吉孝著『「混血」と「日本人」』青土社、2018年。
- 11) 上田誠二著『「混血児」の戦後史』青弓社、2018年。
- 12) 遠藤周作著『沈黙』新潮文庫、2017年。
- 13) 遠藤周作著『新装版 切支丹の里』中公文庫、2016年。
- 14) 宮崎賢太郎著『潜伏キリストは何を感じていたのか』角川書店、2018年。
- 15) 宮崎賢太郎著『カクレキリスト 現代に生きる民族信仰』角川ソフィア文庫、2018年。
- 16) 宮崎賢太郎著『カクレキリストの実像 日本人のキリスト教理解と受容』吉川弘文館、2017年。
- 17) 石川明人著『リキスト教と日本人—宣教史から信仰の本質を問う』ちくま新書、2019年。
- 18) 広野真嗣著『消された信仰「最後のキリスト」—長崎・生月島の人々』小学館、2018年。
- 19) 松田毅一著『キリスト教時代を歩く』中央公論社、1981年。
- 20) 村山幸輝著『キリスト者と福音の心』新教出版社、1995年。
- 21) 加藤嘉一・小中陽太郎・坂上寛一・高津茂編『大磯学—自然、歴史、文化との共生モデル』創森社、2013年。